

オリエンタルランドが東京ディズニーランド開園時に想定していた テーマパークの教育学習機能の継続性の検証

○田中伸彦・平松真衣 [東海大学観光学部]・

二重作昌満 [東海大学大学院文学系研究科観光学専攻]

キーワード: テーマパーク 教育機能 ディズニー

1. はじめに

東京ディズニーランドは2013年に30周年を迎えた。(株)オリエンタルランドの『オリエンタルランド50周年史』⁽¹⁾などによると、同社は1979年4月にアメリカのディズニー社と『東京ディズニーランドの建設及び運営に関する契約』を締結、1980年1月より、東京ディズニーランドの運営準備の一環として米国ディズニーランドへの研修員の派遣を開始した。

1980年代を迎え、東京ディズニーランド・プロジェクトはパーク建設の段階に突入した。1980年11月28日付で千葉県から「東京ディズニーランド建設実施計画」の認可を受け、着工、1981年1月に建設工事が本格的に開始された。1982年には「東京ディズニーランド雇用センター」を開設し、人材育成に努めたうえで、1983年4月15日、ついに東京ディズニーランドが開園を迎えた。ワールドバザール内で行われた開園式典では、オリエンタルランドの社長が開園の宣言をし、「夢と魔法の国の扉」は開かれ、日本のレジャー史に輝く歴史の一頁が刻まれた。

その後、東京ディズニーランドは年々来場者数を増やした。開園2年目の1984年度にはすでに年間来場者数が1,000万人を突破した。東京ディズニーリゾート構想が実現し、東京ディズニーシーが開園した2001年度以降は年間2,000万人以上を達成している。2012年度までの累計来場者は5億人を超える国内屈指の巨大観光デスティネーションとなった。

2. 東京ディズニーランドの教育機能

ディズニーは家族が揃って楽しめる「ファミリー・エンターテイメント」の最高峰として、世界中の人々に愛されてきた。そのエンターテインメントの中には、実は教育的要素が含まれている。実際1980年代に日本のオリエンタルランドでは、学校の児童生徒に活用を促すために「体験学習コンセプト」を掲げている。その体験学習コンセプトが、現在の東京ディズニーリゾートの活用に、どの程度取り込まれているのかを検証することは、テーマパークの経営や運営を考えるにあたり意義のあることであると考えられる。

ディズニーランドの「教育性」とは、従来の教育、つまりあらかじめ決められた一定の知識や技術を一方的に受け手に教え込む型にはまった教育ではない。ディズニーランドはゲストの好奇心や知識欲を自然な形で誘発し、楽しみながら未知の何かを学ぶ動機づけをするという広い意味での教育体験を提供する場である。

本来は娯楽の場所であるディズニーランドを教育の場としても人々のために役立てたいという願いは、ウォルト・ディズニーがディズニーランド計画当初から抱いていた信念である。1953年の秋、米国アナハイムのディズニーランド建設のための資金調達に苦心していた当時、ウォルトはディズニーランドの基本理念を、以下のように位置づけた。

「ディズニーランドの構想はごく単純なものであり、それは人々に幸福と知識を与える場所である。親子が一緒に楽しめる場所。教師と生徒が、ものごとを理解したり学びとるための、より良い方法を見つける場所。年配の人たちは過ぎ去った日々の郷愁にふけ

り、若者は未来への挑戦に思いを馳せる。ここでは自然と人間が織りなす数々の不思議が私たちの眼前に広がる。

ディズニーランドは、アメリカという国を生んだ理想と夢と、そして厳しい現実をその原点とし、同時にまたそれらのために捧げられる。こうした夢と現実をディズニーランドはユニークな方法で再現し、それを勇気と感動の泉として世界の人々に贈るものである。ディズニーランドには、博覧会、展示会、遊園地、コミュニティーセンター、現代博物館、美と魔法のショーなどの要素が集大成されている。このパークは、人間の業績や喜び、希望に満ちている。こうした人類の驚くべき偉業をどうしたら私たちの一部とすることができるか、ディズニーランドはそれを私たちに教えてくれるだろう⁽²⁾。」

娯楽の天才と呼ばれたウォルト・ディズニーはかつて、「笑いは教育の敵ではない」と語っている。アメリカ以外で初めてのテーマパークが東京ディズニーランドである。ここにおいても訪れる日本中の若者、大人、そして世界各国から集まる人々は、楽しい時間を過ごしつつ、知的な冒険を体験し、教育の新しい可能性を発見することが望まれている。

3. 先行研究

東京ディズニーランドに関わる先行研究には、張⁽³⁾や中西⁽⁴⁾など、娯楽面や経済面から考察したものなどは見られるものの、教育の側面からの検討された論考は非常に少ない。例えば、坂本⁽⁵⁾がパーク運営に関して文系学生も ICT 等のシステムを理解し基礎的な知識を習得することが必要とする研究などが見られるのみで、本論の様なアプローチはない。

4. 研究の目的・対象・方法

本論は、東京ディズニーランドの 30 年の歴史の黎明期に、オリエンタルランドが学校の児童生徒に活用を促すために掲げた「体験学習コンセプト」が現代にどの様に受け継がれているのかを検証することを目的とした。

対象とした書籍は、オリエンタルランドが、1983 年に公刊した『東京ディズニーランド体験学習ガイド—学校の先生方のために—』である⁽⁶⁾。オリエンタルランドが自ら公刊書を編集・発行することはきわめて少ないのであるが^{註 1)}、1983 年の開園に合わせて、同社はこの様な公刊書を発刊したわけである。このことから、当初同社が東京ディズニーランドの教育的活用を、如何に戦略的に重視していたかが分かる。本研究ではこの本に記載されている内容を、解析の対象とした。

方法については、具体的には、1980 年代当時、有形の各アトラクションや施設に対してオリエンタルランドが想定していた教育的要素を対象文献から抽出し、それを現在のパークと比較考察をしたい。具体的には当時つくられたアトラクション等に対する記述内容を精査し、現在でもそのアトラクション等は存在するかを確かめ、現在のアトラクション等と比較して、教育的要素の変遷や改廃などについて調査した。

5. 結果

対象書の記載内容を分析したところ、ディズニーランドには、それぞれ教育目的で創られた有形のアトラクションや町並みがあり、様々な分野に分かれていた。本論では、その「さまざまな分野とは何か」を、まずは整理した。

その結果、様々な分野は、以下の 11 の要素にまとめられた。それらを列記すると、「美術」、「歴史と街並み」、「オーディオ・アニマトロニクス」、「ミッキーと仲間たち」、「宇宙探検」、「太古の世界」、「交通機関」、「花と緑」、「立体映像」、「開拓時代のアメリカ」、「日

本と世界との出会い」である。

1980年代の開園当初のオリエンタルランドは、修学旅行や遠足、課外学習などのデスティネーションとして、あるいは学校行事や休日に来園してもらうために、教育的要素の必要性を認識し、上記の要素で、学校関係者や保護者にパーク活用を推奨していたことが明らかになった。

6. 考察

ディズニーランドがつくられた当時、成功するとは必ずしも思われていなかった。日本人が教育に熱心だという民族性も踏まえて、娯楽の中で教育を学べる場所として活用してもらおうという意図が1983年に確かにあったが、その継続性を検証した。つまり、当時のアトラクションと現在のそれとを比較して、考察を行った。

まず、「美術」に関する要素については、シンデレラ城のモザイク壁画などが、今も残っていて継続性が認められる。

「建物や街並み」に関する要素も、基本的に当時のまま残されている。

「オーディオ・アニマトロニクス」に関する要素も、それを使っの、「カリブの海賊」、「ホーンテッドマンション」、名前は変わったが「カントリーベアシアター」も現在も健在である。オーディオ・アニマトロニクスは多くのアトラクションに応用され、開園当時はなかった「モンスターズ・インク ライド・アンド・ゴーシーク」もそのひとつである。「ミッキーと仲間たち」の要素は、現在でも人気を集めており、今では当時では想像もできないほどのキャラクターの数を誇っている。

「宇宙探検」の要素は、宇宙をテーマとした「スペースマウンテン」が、当時のまま現在も存在している。この様なマウンテン系アトラクションとして、現在「3大マウンテン」と呼ばれる「スプラッシュマウンテン」、「ビックサンダーマウンテン」もつくられた。

「太古の世界」に関する要素については、太古を現している「ウエスタンリバー鉄道」は今でも存在する。最初は園内を回ってから、太古の世界を体験できるという流れにしている工夫がリアル感を出している。私たちが全く知らない世界をアトラクションを通じて学べるということから、今も変わらず残っているのだろう。

「交通機関」に関する要素である「トムソーヤ島いかだ」、「蒸気船マークトウェイン号」、「グランドサーキット・レースウェイ」も現存している。

「花と緑」の要素は、現在でも園内をきれいに飾り、各ランドに合わせた植物が植えられていることから、景観を乱さず景色から人々を楽しませていると判断できる。

「開拓時代のアメリカ」に関する要素は、上記の「ビックサンダーマウンテン」や「トムソーヤ島いかだ」、「ウエスタンリバー鉄道」、「蒸気船マークトウェイン号」から楽しむことができる。

しかし、当時あったが、残念ながら今はなくなってしまったアトラクションも複数ある。

まず、「立体映像」の要素については、最初に3Dを使った「マジック・ジャーニー」は今では無くなったものの、後継のアトラクションがつけられ、「マイクロアドベンチャー」となり、2014年6月まで「キャプテンE.O.」が存在していた。

そして当時、トゥモローランドにあった「ミート・ザ・ワールド」は現在では存在しない。「ミート・ザ・ワールド」は、「日本と世界との出会い」に関する要素として重要な位置づけを与えられていたアトラクションであった。このアトラクションは、日本と世界と

の関係性をショーとして見るものだが、教育という面にこだわりすぎて娯楽性に欠けていたため続かなかつたのではないかと考えられる。娯楽の中に教育を入れるという方針から離れたアトラクションだったため、多くのゲストを引き付けることができなかつたのだろう。

以上をまとめると、「結果」の部分で整理した 11 の要素について、9 の要素（「美術」、「歴史と街並み」、「オーディオ・アニマトロニクス」、「ミッキーと仲間たち」、「宇宙探険」、「太古の世界」、「交通機関」、「花と緑」、「開拓時代のアメリカ」）については、今なお 30 年前のオリエンタルランドの戦略や期待を踏襲し、東京ディズニーランドの人気アトラクションとして、娯楽を通じた教育的機能を発揮していると判断できた。

7. 結論

本論を考察した上で述べるができるのは、当初教育目的としての利用が期待された東京ディズニーランドだが、アトラクションこそ存続しているものの、その趣旨が今では衰退しつつあるということである。

東京ディズニーランドで人気のないアトラクションは消えていくのが現状で、新しくつくられたアトラクションになる。そのアトラクションは 1980 年代の教育性を踏まえたものとは考えづらく、娯楽面が高いアトラクションが多い。教育機能は重要であるが、どれだけゲストを楽しませ、魅力を感じさせられるかということが鍵となつてきている。年を重ねていくごとに人の気持ちも感じ方も日々変化し続ける成功することのないテーマパークと呼ばれたディズニーランドはそのような人間と向き合い、これからも進化し続けるといえる。

補注

注 1) オリエンタルランドが自ら著者（編者）となっている公刊図書は極めて少ない。例えば、書籍販売大手のアマゾン社のデータベースで検索しても、本研究で使用した『東京ディズニーランド体験学習ガイド—学校の先生方のために』しかヒットしない。

国立国会図書館のデータベースで検索しても、オリエンタルランド社が著者（編者）となっている書籍は本書の他に、7 件ヒットするのみで、その中でもパークの運営コンセプトを自ら紹介している文献は本書以外にない。そういう意味でも本論で、本書を解析する意義が高いと考えられた（以上、2013 年 1 月 7 日現在）。

引用文献・URL

- (1) オリエンタルランドグループ(2013 年 12 月 13 日現在)『オリエンタルランド 50 周年史』<http://www.olc.co.jp/50th/>
- (2) オリエンタルランド(1983)東京ディズニーランド体験学習ガイド—学校の先生方のために—, オリエンタルランド東京ディズニーランド営業部, 55pp
- (3) 張意欣(2010)日台米テーマパークの成功・失敗要因の研究 : 成功しているのはディズニーだけか 成城大学大学院経済学論文集 12 86-98
- (4) 中西純夫(2012)サービス企業における企業文化と接客従業員の共感・感動労働 : 東京ディズニーランドを中心に 千葉大学人文社会科学研究 24 108-121
- (5) 坂本憲昭 (2010) 情報システム演習においてディズニーランドを教材とする効果, 情報処理学会全国大会講演論文集 72(4), 4.501-4.502
- (6) 前掲書(2)